

ヒラメ漁獲量の動向と稚魚の出現状況

1. 2023年のヒラメの漁獲状況

茨城県におけるヒラメの漁獲量は、2011年以降増加傾向でしたが、2015年の597トンをピークに減少傾向に転じました。2023年は270トンで、前年（183トン）と比較すると増加しましたが、漁獲量は東日本大震災以前と同程度で推移しています（図1）。

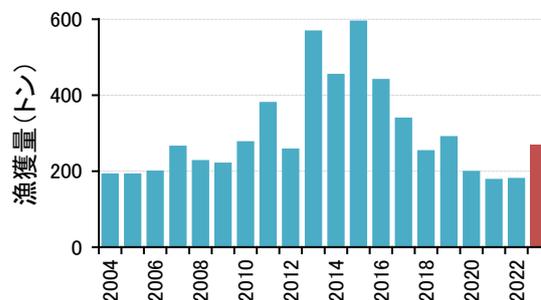


図1. 過去20年の茨城県のヒラメ漁獲量の推移 (1~12月、属地集計)。

2. 2023年生まれの稚魚の出現状況

水産資源の動向は、漁獲状況に加えて、産卵量や仔稚魚の生き残りに関わる環境条件等が影響します。当场では、その年に生まれたヒラメ稚魚の加入量を推定するため、4~12月に月1回、銚田市玉田沖(距岸0.25~2.0マイル、水深約6~20m)で分布密度を調査しています。今年生まれの稚魚は1年後には約30cmに成長し、漁獲されるようになります。

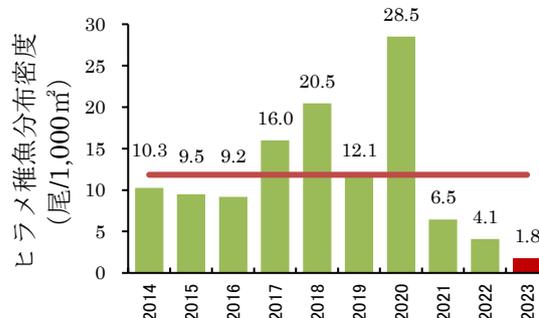


図2. 玉田沖におけるヒラメ稚魚の最大分布密度の経年推移。横線は過去10年の最大分布密度の平均値(尾/1,000m²)を示す。

2023年におけるヒラメ稚魚の最大分布密度は1.8尾/1,000m²で、前年(4.1尾)及び過去10年の最大分布密度の平均値(11.8尾)を下回り、稚魚の分布密度は低い結果となりました(図2)。

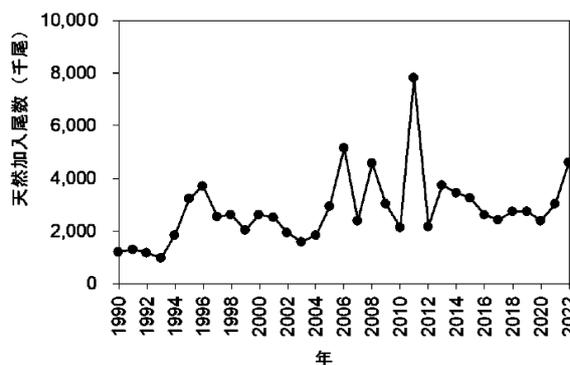


図3. 太平洋北部系群における1990~2022年の天然加入尾数(1歳魚)の推移。

一方で、国の資源評価によると、本県のヒラメが属する「ヒラメ太平洋北部系群」は2010年に卓越年級群が発生し、2011年に1歳魚が大量加入しました※1(図3)。それ以降卓越年級群は発生していないものの、2022年は前年を上回る比較的良好な加入があったと推定されています。

2010年の卓越年級群は翌年以降に漁獲加入し、2015年にかけての漁獲量の増加(図1)に貢献しました。当场の調査における稚魚の分布密度は低い結果となりましたが、2022年の1歳魚は比較的多いと推定されることから、今後のヒラメ資源状況に着目していきます。

(定着性資源部 多賀 真)

※1 令和5(2023)年度ヒラメ太平洋北部系群の資源評価。(詳細版(速報版))

https://www.fra.go.jp/shigen/fisheries_resources/meeting/stok_assesment_meeting/2023/files/sa2023-sc05/fra-sa2023-sc05-03.pdf

【次号予告】R6.2.9発行の「水産の窓」は

『令和5年度東北・北海道ブロック漁業士研修会開催』を予定しています。